様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月１８日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０１２５
研究課題名（和文）　倭玉篇を中心とした漢和辞書の中世から近世への変移

研究課題名（英文）　The change of Chinese-Japanese Dictionary through MUROMACHI era to EDO era

研究代表者
鈴木　功眞（SUZUKI NORIMASA）
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：００３３９２３５

研究成果の概要（和文）：
近世初期の漢和辞書がどのように成立したかを考察するために、中国漢字辞書『玉篇』の寛永八年版和刻本和訓、画数順排列の初期の漢和辞書である『袖珍倭玉篇』(寛文四年刊）の構成を取り上げ、中世漢和辞書との対照研究を行った。その結果、和訓においては『慶長十五年版』系や『夢梅本』といった『倭玉篇』との関連性が認められ、また、画数順排列という改編では、画数順が導入された初期の中国辞書である『字彙』との関連性が認められない日本独自の画数概念が認められることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
To study Chinese-Japanese Dictionary in eary EDO era,I study "Gokuhen" printed in 1631 at Japan, and "Shucin-Wagokuhen" printed in 1664.I compare those dictionary and "Wagokuhen" wrightten in MUROMACHI era. As a result,I get a knowledge that,those Dictionary are connected with "WAGOKUHEN" printed in 1610 and edited by MUBAI, and not connected with "JII" edited by BAI-Yoso at China,so those dictionary are edited by Japanese classification of the number of strokes in a Chinese character.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史・古辞書・漢和辞書・倭玉篇・大広益会玉篇・字彙

１．研究開始当初の背景

『倭玉篇』は中世に成立し、近代まで改編・継承された漢和辞書である。本応募者は、既に 14～16 年度に「倭玉篇の諸本収集及び分類とその諸本間に於ける内容の歴史的変遷に就いての研究」の課題により科学研究費を受給し、中世を中心とした『倭玉篇』諸本を蒐集し、その諸本の分類や発展経緯を考察し、2004 年度学位請求論文『倭玉篇の研究』にまとめたところである。そして、慶長 15 年(1610)の整版本に至る諸本の系譜は明らかにし得たのではなかろうかと考えている。それは、需要に応じて多元的に発生した『倭玉篇』諸本が、『慶長版』に収斂する形で取り込まれていくと言う考えである。しかし、現代、主に日本語史の資料として使用される

『倭玉篇』諸本は、慶長 15 年(1610)以降のものも視野に入れて調査を進める事によって、初めて資料性が明確になるものと考えた。
そのため、近世漢和辞書諸本について資料調査および蒐集を行い、比較考察を行う必要があると判断し、再度科学研究費補助金の受給を申請し、調査の機会を得た次第である。

２．研究の目的

本応募の研究は、近世の『倭玉篇』を中心とした漢和辞書に於ける部首排列の具体的な変遷の実態や、和訓の変遷を捉えた上で、中世漢和辞書との変移を明らかにする事に目的を置いた。中世から近世への辞書の変遷として『節用集』に関しては研究が比較的行われているが、『倭玉篇』の場合、その実態は、殆ど明らかにされてこなかったものと言える。概要を述べるならば、近世の時期は、『倭玉篇』の整版本が多数刊行され、同時に、継続的に漢籍の大量流入があり、かつ、和刻本の漢籍字書類の出版が盛んになり、附訓本も出現する。そこで『倭玉篇』に限定せず、近世初期の漢和辞書諸本がどのような経緯で編纂されたかに視点を広げるために、『倭玉篇』の諸本と、漢籍字書『大広益会玉篇』の、特に和刻・附訓本、そして画数による検索が可能となった近世辞書類の、それぞれの和訓の関連性の有無、それは、和刻本の和訓の由来等の実態を明らかにする事を目的とした。それが結果として、『倭玉篇』の側の和訓の取捨選択の実態を明らかにする事にも至るものと想定した次第である。

３．研究の方法

本研究を開始する時点で、関連する先行研究が発表された。近世初期『倭玉篇』諸本の掲出字に付された和訓の変遷、そして、画数順排列の漢和辞書の系譜に就いてである。それらは『江戸時代流通字引大集成』を参照していたために、その集録資料の位置づけを検討することも視野に入れることとした。その上で、本申請者が既に蓄積している中世『倭玉篇』に就いての記載内容と対照させた上で、中世から近世への『倭玉篇』を中心とした漢和辞書の変移、画引き化における実態を明らかにしようとしたものである。
しかし、『江戸時代流通字引大集成』に所収の漢和辞書群のみでは中国招来漢字辞書の和刻本や日本改編本については手薄であることが判明したために、それらについては独自に調査蒐集を行うことによって研究を推進する必要性があることが判明した。

４．研究成果

近世初期『倭玉篇』の和訓を考察するために、近世極初期に位置する『慶長十五年版』類を取り上げて、和訓考察の方法を検討し、『慶長十五年版』の和訓がどのように位置づけられるかを検討した。
その上で、『慶長十五年版』とは別系統である近世初期の漢籍辞書『大広益会玉篇』が和刻本として片仮名和訓を持つことになり、漢和辞書としての位置づけを得たのではないかと推定し、その和訓についてもどのように位置づけられるかを検討し、典拠となる先行辞書に関する検討を加えた。『夢梅本』および『寛永五年版倭玉篇』との関連性を明らかにすることができた。
さらに、近世漢和辞書は『慶長十五年版倭玉篇』と『大広益会玉篇』への依存と逸脱というのが一視点として成立するようであるという観点から、調査を進めた。その対象として、近世画引の漢和辞書のうちごく初期のものである『寛文四年版袖珍倭玉篇』に就いて考察を行った。画引きは中国字書『字彙』に代表され、『康熙字典』の方式として現在でも継承されているものであるが、日本での初期段階では『字彙』などとは異なる部首排列と画数意識によるものが見られることを明らかにした。具体的には例えば「出」を８画とするなどと言ったものである。そして、和訓は『倭玉篇』の中でも『慶長十五年版』に代表されるものの継承をしていると言ったことが認められた。
以下、個別に詳細の成果を記述する。

(1)和刻本寛永八年版『大広益会玉篇』

梁代の顧野王により 543 年に編纂された漢字辞書が『玉篇』であり、宋代の陳彭年らにより 1013 年に『大広益会玉篇』（以下、会玉篇とする）の名で増補された。宋代以降『会玉篇』は、元、明、清代を通じて版を重ね、諸版が日本に伝来し、かつ、五山版や慶長版、寛永版として日本でも開版された。日本には、古いところでは次のものが現存している。（カッコは現代の複製である。）

Ａ 宋版宮内庁書陵部蔵本
Ｂ 宋版内閣文庫蔵十一行本
Ｃ 元版宮内庁書陵部蔵円沙書院延祐本
Ｄ 元版尊経閣文庫蔵円沙書院泰定本
Ｅ 元版内閣文庫蔵十二行本
Ｆ 元版静嘉堂文庫蔵至正丙午本
（Ｇ 元版建安鄭氏本）
Ｈ 元版天理図書館蔵本
Ｉ 明版静嘉堂文庫蔵与畊書堂本
Ｊ 明版内閣文庫蔵文明書堂本
Ｋ［日本刊］五山版尊経閣文庫蔵本
Ｌ［日本刊］慶長９年版（Ｃの覆刻）

これらの後に、寛永期のものが続き、先行研究によれば片仮名の和訓や字音、返り点が加えられたのは寛永 8 年版（1613 年、以下、和刻本とする）がはじめてとされる。
先行研究によれば寛永期の和訓入り本としては、

『和刻本』（寛永 8 年版）
寛永 18 年版（1641 年）
寛永 21 年版（1644 年）
および、無刊記本が挙げられている。

そこで、近世漢和辞書の考察を進めるに当たり、『和刻本』に付された和訓がいかなるものであるのか、『倭玉篇』諸本とどのような関係にあるかを調査した。『倭玉篇』諸本は『和刻本』直前で言えば次のものが開版されている。

古活字版（慶長年間）　　三種
夢梅本　（慶長 10 年刊〈1605〉）
慶長 15 年版（1610）三種
慶長 18 年版（1613）
元和寛永頃版
寛永 5 年版（1628）
寛永 7 年版（1630）

このうち、『慶長 15 年版』（以下、慶長版とする）から『元和寛永頃版』までは内容が殆ど同一のものであり、『寛永 5 年版』と『寛永 7 年版』は同内容で、『慶長版』に増補を行ったものである。

調査は掲出字数が比較的多い部首を選びサンプル調査として行った。選んだ部首は『会玉篇』全 30 巻 542 部首の中から、巻第 1「示」部、巻第 10「辵」部、巻第 15「禾」部、巻第 20「雨」部、巻第 22「火」部、巻第 30「酉」部と、巻の偏りのないようにした。対象とした掲出字数は 1245 字で、全 22772 字のうち約 5%に相当する。この調査の結果、『和刻本』の和訓は、『夢梅本』と『寛永五年版』に依拠するものとの結論を得た。

以上の考察の結果をまとめると次の通りである。

寛永 8 年に刊行された『和刻本』は、掲出字の排列順序や字注の考察から、『会玉篇』諸本のうち、元版宮内庁書陵部蔵円沙書院延祐本、元版尊経閣文庫蔵円沙書院泰定本、元版静嘉堂文庫蔵至正丙午本、慶長 9 年版の系統のものを底本に使用していることが明らかになった。そして、特に刊行年などの事情から慶長九年版の可能性が高いことを推定した。また、字注に就いて『夢梅本』により改編されている箇所も見られた。和訓に就いては、「示」「辵」「禾」「雨」「火」「酉」部（合計 1245 字）のサンプル調査から、『夢梅本』『寛永 5 年版』に依拠していると結論付けた。

そこで、なぜ『和刻本』は編纂時に『夢梅本』と『寛永 5 年版』を使用したかに就いて、推測を述べておきたい。『夢梅本』は現在では『倭玉篇』の一つとされているが、原典の書名を『玉篇』としており、字注を豊富に有する点で『会玉篇』の代表として選択され、字注の傍訓や和訓が参照されたのではないかと推測する。その上で、和訓を増補するために、『寛永 5 年版』を参照したのであろう。なぜ『寛永 5 年版』を選択したかと言えば、『和刻本』の直近の『倭玉篇』だと言う点のみならず、『慶長版』から増補されており『倭玉篇』の中でも詳細なものであることから、和訓の豊富な資料として選択されたのではないかと推定する。つまり、『和刻本』は漢籍『会玉篇』の和刻本という立場を取りつつ、しかるべき和訓を付すことにより、漢籍『会玉篇』と国書『倭玉篇』の、二種の性質を具備しようと意図して編纂されたものと考えるのである。

では、なぜ二種の性質を具備しようとしたのかが疑問となる。それに就いてはまだ推測しか持ち合わせていないが、敢えて述べるならば、次の通りである。日本で使用する漢和辞書としての利便性を考慮した際に、漢籍字書の豊富な義注は有用であるが、漢字の読み方の点で漢籍『会玉篇』の傍訓のみでは不十分で、当時流布していた国書『倭玉篇』の和訓を取り込み充実させたかったと言うことではないかと考えている。それは、現行の漢和辞書が、掲出字の注に国字国訓など日本での独自の用法を併せて示していることと対応するもののように思われるのである。

(2) 寛文四年版『袖珍倭玉篇』

近世初期漢和辞書の展開は中世末からの『倭玉篇』の系譜がある一方で、漢籍字書の影響を再び強く受けたものであるといえる。具体的な資料としては『大広益会玉篇』もあるが、『字彙』に代表される画引き（画数順）が大きなものとして指摘されている。

『倭玉篇』諸本の中で、画引きが導入された最初のものは、寛文 4 年版『袖珍倭玉篇』（1664 年）であり、その画引きは『字彙』や、『字彙』に先行する漢籍字書『五音篇海』など『海篇』類の影響を受けた。『袖珍倭玉篇』は画引きの部首目録（目次）を巻頭に置き、各部首内の掲出字排列も画引きとしている。しかし、本文の部首排列自体は『大広益会玉篇』のままであると指摘がある。

そこで、今回、寛文 4 年版『袖珍倭玉篇』を具体的考察対象とし、その画引きの具体的な状況をまとめるために、近世初期刊行の『倭玉篇』や『大広益会玉篇』諸本や『字彙』と対照させた。その結果、『袖珍倭玉篇』の内容は、それらのうち、寛永 5 年版（1628 年）や正保 3 年版（1646 年）の『倭玉篇』のままで、形態として画引きにされたが、その画引きに『字彙』に於ける画数判断の影響は認めにくいことを示そうとするものである。

また、この頃の『倭玉篇』の部首数は慶長 15 年版（1610 年）に代表される 477 部首から、寛永 5 年版などのように『大広益会玉篇』に準じた 542 部首へと増補される。そして、『袖珍倭玉篇』は『倭玉篇』の中で最初に部首目録を画引きに排列したものであるが、その部首数と排列順序に就いても具体的な状

況を報告した。
　今回、近世初期『倭玉篇』の系譜の中で、画引きがどのように位置付けられるかを考察するために、『倭玉篇』の中で最初に画引きが始まったとされる『袖珍倭玉篇』(寛文 4 年版) を採り上げ、その具体的状況を示した。画引きという概念は『字彙』や、『五音篇海』など『海篇』類から始まったものであるが、本稿での調査の結果、先行画引き字書である『字彙』の具体的画数判断や排列の影響は認められず、『倭玉篇』の中で『慶長 15 年版』以降になされた増補本系の『寛永 5 年版』や『寛永 15 年版』、『正保 3 年版』系統の内容を画引きに改編したものであって、同画数内の排列はそれらの出現順になっているものと判断した。先行画引き字書である『字彙』の具体的画数判断や排列の影響が認められなかったということは、『袖珍倭玉篇』の画数判断が『字彙』の影響を受ける直前の日本人の画数概念を反映していると言えるものかとも考えた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①鈴木功眞、寛文四年版袖珍倭玉篇の画引きに就いて、言語変化の分析と理論、査読無、2011、pp.349-361
②鈴木功眞、寛永八年版和刻本大広益会玉篇の和訓―『夢梅本』および『寛永五年版倭玉篇』との関係に就いて―、訓点語と訓点資料、査読有、125 輯、2010、pp.39-52

６．研究組織
(1)研究代表者
　鈴木　功眞（SUZUKI NORIMASA）
　日本大学・文理学部・准教授
　研究者番号：00339235

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし